協働し、組織的にすすめる校内研修

～カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して～

柳川市立矢ヶ部小学校
教　諭　　野間口　美奈子

こんな手立てによって…

カリキュラムマネジメントのサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、校内研修の各段階において、教務としての働きかけを行った。

こんな成果があった！

教職員の一人ひとりが研修に対する参画意識が高まったことが授業力向上に結びつき、協働し、組織的に校内研修をすすめることができた。

１　考えた

「生きる力」が求められ、グローバル化が進む中、教職員の授業力向上が図られなければならないことは必要不可欠な要素である。また、福岡県教育施策実施計画の《施策１６》や教育力向上福岡県民運動におけるアクションプラン《提案４》にも、教職員の資質・能力の向上や学校の組織力の必要性が示されている。つまり、教職員の授業力向上が効果的に図られるようにするためには、校内研修が組織的・継続的にすすめられることが大切であると考えた。そこで、校長・教頭の指導のもと、重点目標達成のために、計画（Ｐ）→実施（Ｄ）→評価（Ｃ）→改善（Ａ）のサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、研修に関する教務運営の有効性を探ることにした。教職員が協働し、組織的に進める校内研修を目指して、本主題を設定した。

２　やってみた

研究の実際では、次のようなＰＤＣＡサイクルで、教務運営の有効性を明らかにしていった。

①【課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）
②【計画の共有化】段階における働きかけ（Ｐ）
③【実施】段階における働きかけ（Ｄ）
　ア　授業研究の場合
　イ　プチ授業研究（日常の授業）の場合
④【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）

３　成果があった！

研究を進めてきた結果、次のような成果があった。

①　【課題の共有化】（ＣＡ）からスタートし、【計画の共有化】（Ｐ）→【実施】（Ｄ）→【成果と課題の共有化】（ＣＡ）の各段階において、教務主任としての働きかけを行ったことで、マネジメントサイクルが循環し、めざす教職員の姿が見られるようになった。
②　担任の授業力向上とともに、児童の学力の伸びが見られた。

＜目次＞　学校経営・運営部門作品

協働し、組織的にすすめる校内研修

～カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して～

１　主題設定の理由 ・・・

＜本文＞　学校経営・運営部門作品

協働し、組織的にすすめる校内研修

カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して

柳川市立矢ヶ部小学校
教諭　　野間口　美奈子

１　主題設定の理由

（１）今日の教育的課題から

「生きる力」が求められ、グローバル化が進む中、「知識基盤社会」を担う子どもたちの課題の視点として、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学習意欲の向上や学習習慣の確立」などが挙げられている。それらの課題を解決していくためにも、教職員の授業力向上が図られなければならないことは必要不可欠な要素である。

また、福岡県教育施策実施計画の《施策１６》（信頼される教職員の育成）には、教員としての資質・能力の向上や指導技術の継承の必要性が述べられている。

さらに、教育力向上福岡県民運動におけるアクションプラン《提案４》には、「本質的な課題を解決する必要性を一人一人の教師が理解し、自らの力量を高め、学校の組織力を強化し、共通した指導方針のもとに、学校全体で子どもを育てていくことが大切である。」と述べられている。

つまり、教職員の授業力向上が効果的に図られるようにするためには、全員が課題を分析・把握した上で、学習指導の目標・内容・方法を共有化して計画し（Ｐ）、それぞれが実践し（Ｄ）、それを評価し（Ｃ）、改善策を見出していくこと（Ａ）が組織的・継続的に図られることが大切であると考えた。このことは、確かな学力を身に付けた子どもを育てていく上でも意義深い。

以上のように、カリキュラムマネジメントの手法を取り入れることにより、具体的方策を見出し、教職員が協働し、組織的に進める校内研修を目指して、本研究主題を設定した。

（２）本校の教育課題・経営課題と教職員構成から

平成２５年度の本校の教育課題・経営課題は、次のようなものであった。

【教育課題】…①論理的思考力・表現力の育成
　　②規範意識及びよさを認め合う態度や思いやりの心の育成

【経営課題】…①授業力と学級経営力の向上
　　②“チーム矢ヶ部”によるカリキュラムマネジメントの推進

この背景には、「他者の話をしっかり聴き、自分の考えと比べたり重ねたりしながら、論理的に整理し、表現することが不十分である。」という子どもの実態と、「教師主導型授業から脱却できず、考えを深める手立てが不十分である。」という教師の実態があった。

また、数値的根拠として、全国学力・学習状況調査や標準学力調査の結果から、全国平均

を上回っている学年もあれば、下回っている学年もあり、学年間の学力の状況に大きな差が見られることも挙げられる。このことは、児童の実態や家庭の教育力はもとより、教師の指導力の違いと指導方法のばらつきが原因の一つであると考えた。

本校は、各学年単学級６クラスに加え特別支援学級１クラスの全７学級の小規模校である。教職員の異動によって、担任が平成２４年度は４人、平成２５年度は３人、本年度は３人赴任してきた。ほぼ、半分の教職員が毎年入れ替わっているという現状である。そんな中、全教職員が子どもの実態を的確に把握し、課題を共有し合って一貫した教育活動を行い、成果を上げることは容易なことではない。また、それができたとしても、その組織文化が継承されていかなければ、学校教育目標は達成しがたい。

そこで、平成２４年度に校内研修担当として行ってきた校内研修のすすめ方を振り返り、平成２５年度は教務主任として、協働し、組織的に研修をすすめていく方途を探ることは、研修の日常化を図り、教育効果を発揮する上でも意義深いと考えた。

（３）教務運営の立場から

平成２５年度は、新任教務主任・第５学年の担任として職務を遂行することになった。教務主任としての立場から組織的に校内研究をすすめていく上で、自分自身の実践を通して内側からの発信ができる機会を与えられたことは、これまでの実践の評価・改善策をもとに、チーム分析と個人分析ができ、他の教職員と協働実践ができるよい機会であると考えた。

また、平成２５年度は、柳川市の学校教育研究指定（学力向上）の３年目を迎え、研究発表会の年でもあった。発表会と聞くと、研究のまとめであり、ゴールのようであるが、校長・教頭をはじめ、教職員は、「本校の研究のまとめではなく、研究の過程や方法を見ていただく」という姿勢で発表会に臨んだ。つまり、「これまでに積み上げてきた研究を継続し、他にも広げていくことが本当の研究」という立場で、教職員の授業力向上への意識改革を図る主題研究の運営に絞り、本研究主題を設定した。

２　主題の意味

（１）協働してすすめる校内研修とは

学校の教育目標達成のために、教職員全員が参画意識をもち、課題を解決するための方途を探り、互いの資質・能力の向上に向けて学び合う研修のことである。

目指す教職員の姿としては、次のような「わかる授業づくり」を目指す姿が考えられる。

- 児童の実態をもとに、教材研究や支援の在り方を研究する姿
- 日常的に課題を意識した研究・授業をする姿
- 他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿
- 自分の研究成果を他の教職員に広げていこうとする姿

（２）組織的にすすめる校内研修とは

学校の教育目標達成のために、それぞれのキャリアステージに応じた参画の仕方や共通実践を通じた指導を連続的・継続的・発展的（※）に行っていく組織の力を生かした研修のことである。（※）参考文献「実践・カリキュラムマネジメントＰ１２より」

目指す教職員の姿としては、次のような「他の教職員と連携」していく姿が考えられる。

- それぞれの実践をもとに研究主題をより具体化していこうとする姿（連続）

・　研究の内容や成果を価値づけ、継承していこうとする姿（継続）

・　研究の有効性を分析したり、課題に対する改善を加えていこうとする姿（発展）

（３）カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通してとは

校長・教頭の指導のもと、研究主任と連携を図りながら、研究の成果を上げるために、計画（Ｐ）→実施（Ｄ）→評価（Ｃ）→改善（Ａ）のサイクルを「連続的・継続的・発展的」に循環させながら、その具体的方策を立て、研修を運営することである。

平成２４年度･２５年度の本校の校内研修の講師であった田村知子氏（現　岐阜大学　教育学部・教育学研究科・准教授、　平成２５年度までは中村学園大学　准教授）は、「困難といわれる評価・改善（ＣＡ）段階こそがカリキュラムマネジメントの鍵である」と述べている。カリキュラムマネジメントの手法を取り入れ、校内研修のＰＤＣＡサイクルにおいても評価・改善からスタートし、計画を立てて実行する（ＣＡ→ＰＤ）具体的方策を立てることで、校内研修の協働化・組織化が図られると考えた。具体的方策としては、次のような段階での働きかけが考えられる。

①　【課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）

・前年度の重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケートの結果分析、各学力調査や市販テストの結果分析を通して、研究の方向性をつかみ、課題を明確にする。

②【計画の共有化】段階における働きかけ（Ｐ）

・校長、教頭の指導のもと、研究主任と連携して組織づくりを行い、研修の目標、内容、方法について話し合ったり、年間計画を立てたりする。

③【実施】段階における働きかけ（Ｄ）

ア　授業研究の場合

・教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定（アーＰ）

・授業研究当日の役割分担（アーＤ）

・ワークショップ型授業整理会の運営（アーＣ）

・リレー研修だよりの役割分担（アーＡ）

イ　プチ授業研究（日常の授業）の場合

・重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成（イーＰ）

・教室訪問による見取り（イーＤ）

・プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入（イーＣＡ）

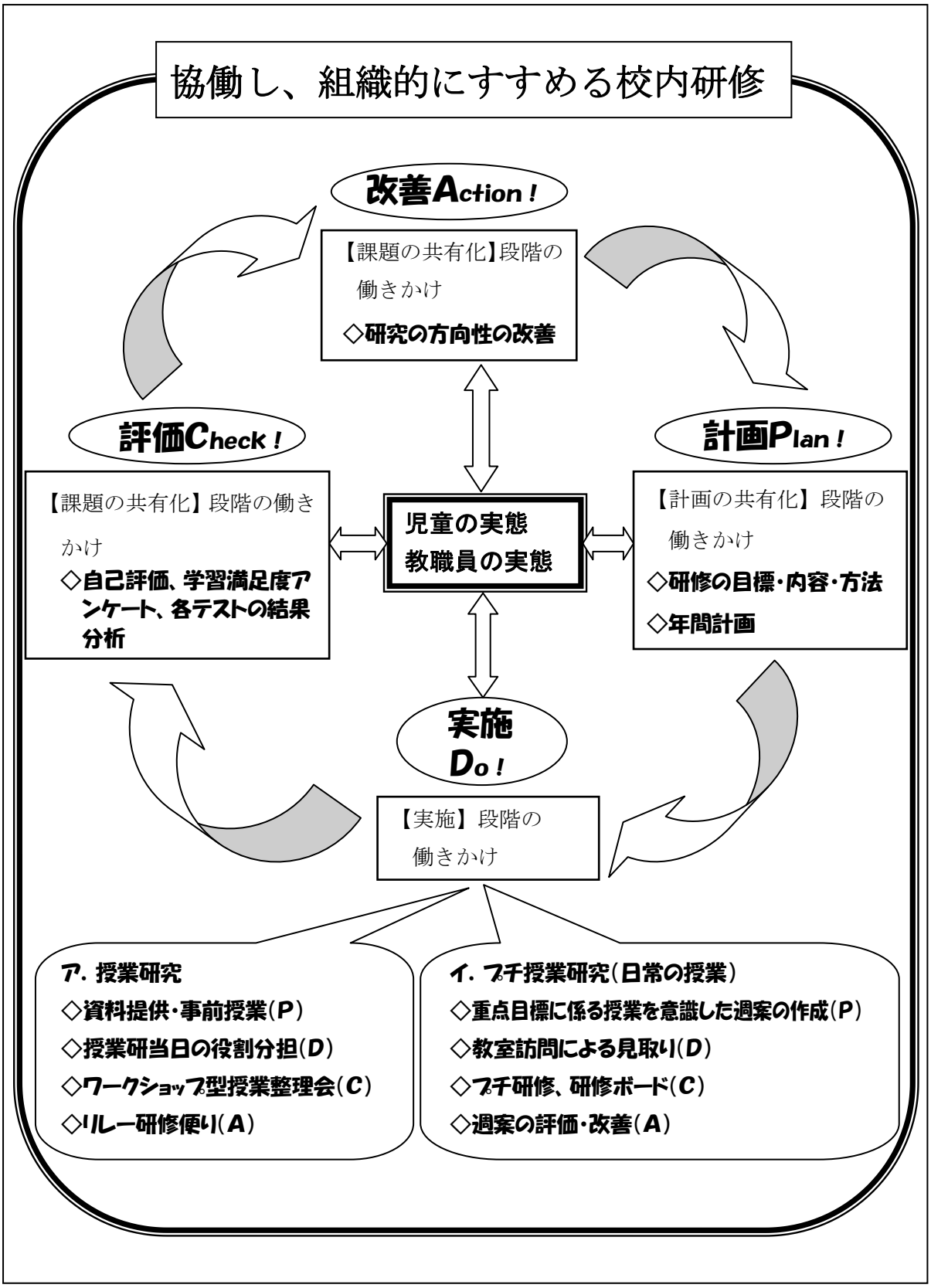
④【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）

・学期毎に、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習アンケートの結果分析、各学力調査や市販テストの結果分析を行い、研究の方向性を見直し、評価・改善していく。

３　研究の目標

協働し、組織的にすすめる校内研修を運営していくために、マネジメントの手法を取り入れた教務運営の在り方を究明していく。

4　研究の構想



↑資料①　研究構想図（校内研修のマネジメントサイクル）

５　研究の実際

（１）【課題の共有化】段階における働きかけ

①　平成２４年度の課題を受けて、平成２５年度は、校長より重点目標「よく聴き、しっかり考える子どもの育成」が示された。また、平成２４年度まで在籍していた主幹教諭が作成した「重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価」の結果分析から、児童への学習指導の在り方の課題は明確であった。そこで、教職員自身の研修に対する評価である「カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取り組み」の評価欄を設け（資料②参照）マネジメントサイクルを意識した自己評価を行うことにした。

平成２５年度 重点目標(学力面)に対する達成状況 自己評価

《重点目標》
よく聴き、しっかり考える子どもの育成

4…90%以上達成　3…70～80%程度　2…60～70%程度　1…50%未満
◎ ①と②については、児童の姿（できるようになっているか）で評価してください。

	評価の観点（子どもの姿 や 教師の姿勢）	1学期	2学期	3学期
①学習の構えの指導	時間を守り、教科書やノートなどの学習の準備をして授業の開始を待っている。			
	授業始めと終わりのあいさつがきちんとできている。 ・教師に注目して　・背筋の伸びた姿勢で			
	机の上や身の回りをきちんと整理し、机上のルールを守って学習している。			
	指名されたら、はっきりとした声で返事をして立つことができている。			
②「よく聴き、しっかり考える力」育	自分の考えをつくり、絵図・式・言葉などを使って、分かりやすくノートに考えを書くことができている。			
	友達の話を、目と耳、心で聴くことができている。 ・話し手の方を見て・うなずき、あいづち、拍手 等の反応をしながら			
	友だちの考えと比べて、共通点や相違点を見つけながら、つないで発言することができている。			
	学年に応じた話し方で、結論を先に、その後で根拠（理由）を説明する話し方(結論先行型）ができている。			
	ペア・トライアングルや全体での話し合いの結果から、考えを深めることができている。(考えの付加・修正・強化の変容)			
	学習中の自他のよさやがんばりを認め合い、評価し合うことができている。			
③教師の基本的な導技術の向上	始業時刻と終業時刻を守って、授業を行っている。			
	教室の整理整頓（机・棚・児童の作品 等)を行い、環境美化に努めている。			
	毎時間「めあて」と「まとめ」を、きちんと板書し、板書の構造化を図っている。			
	思考させる時間と表現させる時間(書く・交流)を保障している。			
	継続的なノート指導を行っている。			
	子どもが1回聞いて分かるような短く的確な説明や、ぶれない指示を心がけている。			
	思考を促す比較活動の具体化をし、読みを深めさせることを意識した授業の実践をした。			
	子どもの発言の連続で授業が進んでいくような発問を心がけている。(子ども7：教師3)			
	個別支援の工夫（机間指導や声かけ、ヒントカード、個別の問題の準備…等）をしている。			
	朝の言語活動, 放課後の補充タイム をきちんと実施している。			
④学級経営	常に笑顔を意識し、子どもたちに笑顔で接した。			
	登校時の子どもたちを教室で迎えたり、休み時間の子どもたちの人間関係や行動について観察し、実態把握及び児童理解を行った。			
	子どもたちとの関わりを重視し、個々の存在を大切にした励ましや賞賛等ができた。			
	「間違いを言える」「間違いを認める」「他のよさを認める」等の学級での支持的風土をつくるための指導を行った。			
⑤カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組	自己の校務分掌を把握し、計画的に企画・立案・起案・実施することができた。			
	実施後の評価をもとに、改善（来年度へ向けての具体的な取組）を明らかにした。			
	校長、教頭、教務主任及び教職員と連携を図りながら、校務分掌を遂行することができた。			
	授業づくりについて、自分の考えを積極的に述べることができた。			
	授業研究及び授業整理会を通して、日々の授業づくりの具体化（週計画案作成時等）を図ることができた。			
	国語科の授業づくりを他教科及び他領域に活かす授業づくりができた。			
	授業研究及び授業整理会を通して、自己の授業力（授業構想力・授業実践力）を高めることができた。			

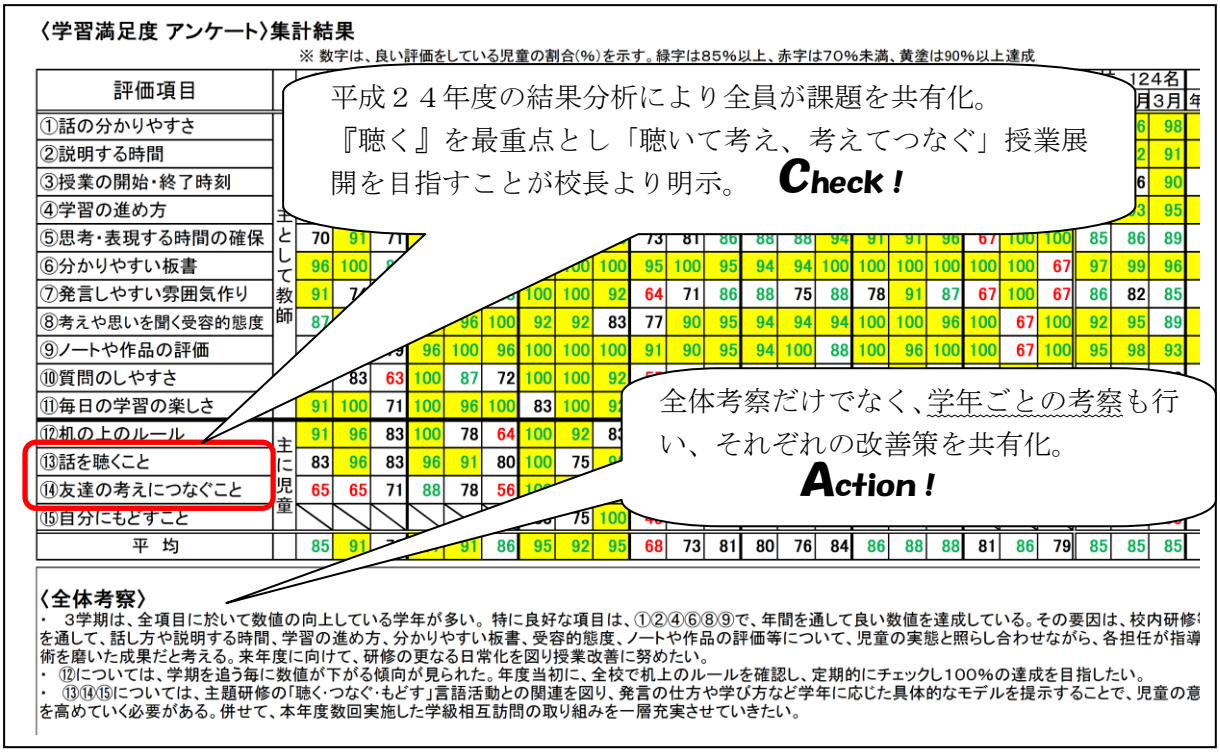
平成２４年度の結果分析により課題が明確に。 **Check！**

平成２５年度は新たな評価項目を付加し、これまでの項目も重点目標に合うように修正。 **Action！**

資料②　重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価

②　平成２４年度の児童対象の学習満足度アンケートの結果分析を教職員全員でチェックし合い、全体考察の欄に改善策を挙げた。平成２５年度は、各学年の指導に反映するよう、学年ごとに改善策を記入する欄を設け、それぞれの課題・改善策を出し合い、共有していくことにした（資料③参照）。

③　平成２４年度の各学力調査・市販テストの結果分析（資料④参照）をもとに、学年ごとに落ちている単元・領域等を洗い出し、学年の系統を考慮に入れながら、国語科・算数科において重点単元を決め、各１０時間の加配を行った（資料⑤参照）。



〈学習満足度 アンケート〉集計結果

※ 数字は、良い評価をしている児童の割合(%)を示す。緑字は85%以上、赤字は70%未満、黄塗は90%以上達成

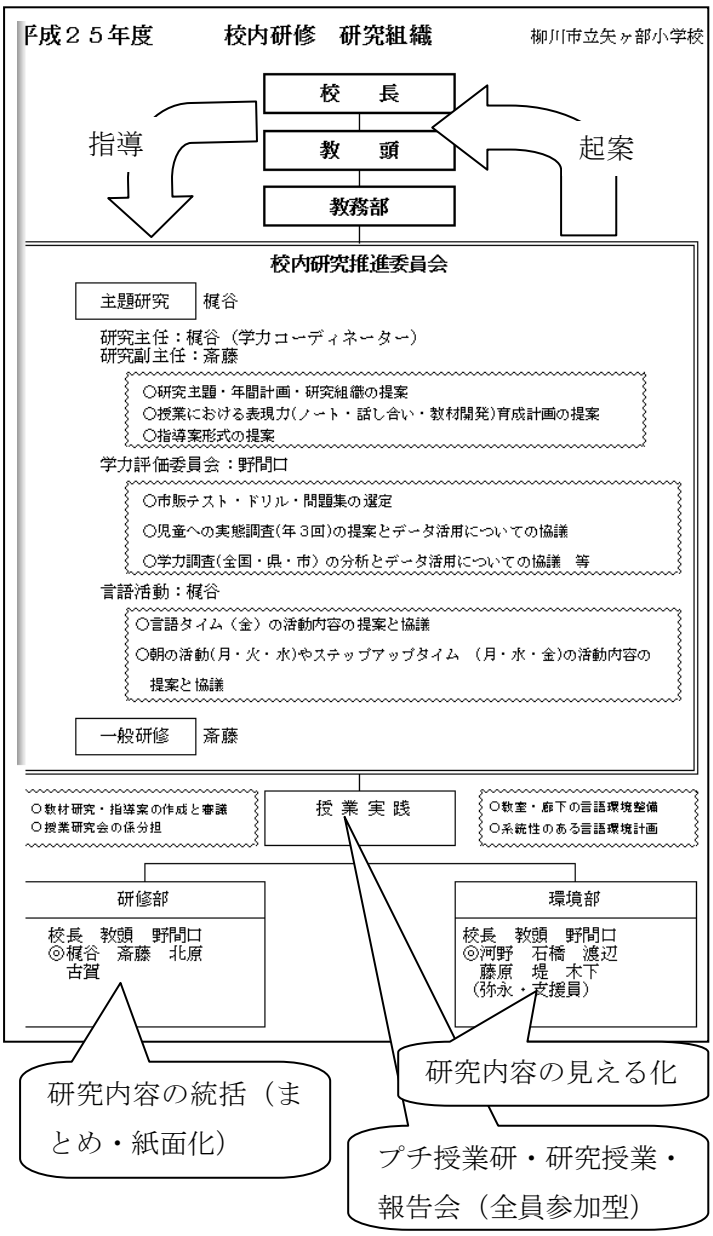
| 評価項目 | | |

（２）【計画の共有化】段階における働きかけ

① 平成２４年度の課題を受けて、研究推進委員会を開き、平成２５年度は、研究主題「読みを深め合う子どもを育てる国語科学習指導～思考を促す比較活動を通して～」を設定した。教職員の意識としては、「“読みを深め合う”とはどんなことか？」「どんな子どもの姿が考えられるのか？」「思考を促す支援、比較活動とは？」など、様々な疑問や研究の方向性についての不安があった。そこでまず、１学期初期の段階での研究構想の共有化と今後の方向性の共有化を図るために、ア～エの手順で計画づくりを進めた。

ア…研究組織づくり
イ…研修年間計画づくり（省略）**Plan！**
ウ…研究内容の具体化
エ…校内研修の評価・改善

ア・エは主に教務主任が、イ・ウは主に研究主任・副主任が中心となって推進した。（資料⑥参照）



↑　資料⑥　校内研修研修組織と内容

ア～エの内容については、校長・教頭に起案をし、指導を受けた後、教職員全体で話し合って決定していった。

アの組織については、学年部会も考えられたが、７人という少ない人数のため、支援加配・養護教諭・司書教諭を含め全員参加型での研究を進めていくことにし、役割として、研究を内容を統括する研修部、見える化を図るための環境部に分けた。

イの研修年間計画づくりにおいては、１学期にプチ授業研（※）・２学期に研究授業・３学期に研究報告会を行うため、その日程を定めていった。

ウの研究の内容については、これまでの研究を土台にして、１学期に提案授業やプチ授業研を行い、研究主題の内容を価値づけ、具体化していくことにした。（※）プチ授業研については、【実施】段階における働きかけで詳しく述べる。

エの評価・改善については、（１）で述べた通りである。

（３）【実施】段階における働きかけ

本校の公開授業には次のような二つのパターンがある。（資料⑦参照）

ア．指導案を作成して公開する授業研究

イ．教材分析と板書・発問計画のみを作成して「読みを深め合う段階（１５～２０分）」を公開するプチ授業研究

チーム矢ヶ部の授業づくり

キーワードは、
「研究の日常化」と「自分意識」

矢ヶ部小学校の校内研究推進のキーワードは、「研究の日常化」。つまり、日常の授業づくりに生きるような研究をすすめることです。そのために、自分の研究を自分だけのものにしないことと、他の教師の授業づくりを他人ごとに終わらせず、自分意識を持って関わることです。

全員が関わる授業づくり
矢ヶ部小学校の公開授業は２パターン

指導案を作成して公開する授業研究と、教材分析と板書・発問計画のみを作成して公開するプチ授業研究があります。

年に1～2回、指導案を作成し、「事前授業→授業→授業整理会」を行い、内容・方法を深く研究します。
（パターンⅠ）

学期に1～2回、板書・発問計画を作成し、「深める段階（15～20分）を見合い」ショートの研修を行います。
（パターンⅡ）

（パターンⅠ）
公開授業に向かって校内研究を進めていく際、授業づくりが授業者任せになると、せっかくの研究が授業者の研究のみに終わってしまうことがあり、他の学年・学級に広がらないという課題がよく見られます。
授業後の協議会においても、一方的な質問・意見が多く、次の日からの授業に生かされないものや他の学年・学級の授業に生かされないものになりがちです。
その原因として、授業の改善策が具体的に出されないこと、授業づくりに他の教師が深く関わっていないことが挙げられます。
「研究授業、お疲れ様！」と、労いの言葉はあるものの、「明日の授業は、こうしよう。」「自分の学級では、こうしよう。」という、学校全体に広がる研究になっていないのです。

そこで

全員が関わる事前授業をします
① 事前に教材文を全員が読んで、教材分析をします。
② 授業1週間前に、事前授業（板書・発問計画）を教室で行います。
※指導案審議ではなく、授業づくりをどうするかで内容・方法についての意見を出し合います。

授業者による授業が行われます
① 事前授業から明らかになった授業の視点をもとに、板書・発問の記録をとったりビデオをとったりします。
② 3色の付箋に成果（黄）課題（桃）改善策（青）を書きながら、授業を見ます。

全員が関わる授業整理会をします～ワークショップ型授業整理会～
① 授業中に記録した3色の付箋を出し合いながら、授業の振り返りをします。
※特に、課題→改善策を中心に話し合い、次の授業に生きるようにします。
② 毎回、進行役・整理役を交代し、授業のまとめとなる研修便りもリレー形式でつくります。

（パターンⅡ）
パターンⅠの授業研究は、深い教材研究のもと、何度も指導案を検討し、事前授業でシミュレーションをした後に、授業を公開し、ワークショップ授業整理会を行います。
授業者も参観者も大変勉強になり、実りの多い研究であると考えます。
しかし、その授業にかける時間と労力は、計り知れないものがあります。
日常的に授業をどう変えるか、という視点に立つと、指導案づくりに時間をかけず、毎日の授業に生かせる授業づくりも必要であると考えます。

そこで

準備に負担がかからないようにします
①もちろん、教材研究は必要です
②授業前日に、ねらいと板書・発問計画を配布します。
※指導の流れは授業者の手書きのノートに記されており、パソコンに向かう時間を省略します。

授業者による授業が行われます
①授業のねらいと比較思考を促す手立て（板書・発問）に焦点を絞って授業を行います。「深める段階」（15～20分）のみ参観します。

プチ授業整理会をします
① 授業後に、教室や職員室で立ち話をし、授業の振り返りをします。
（スタンディングミーティング）
② 授業中に記録した3色の付箋を模造紙に貼って授業者にわたします。
※特に、話し合いの時間は設けず、課題→改善策を中心に、次の授業に生かします。

↑ **資料⑦ 本校の公開授業のパターンとその流れ**

この二つのパターンにおける働きかけを、行っていった。

① アーP　教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定を行った。

ここでの約束として、事前授業の前に必ず教材文を読み、自分なりの解釈をしておくこと、担当学年の授業とのつながり（系統）を考えて、自分だったらどんな授業をするかを考えておくこととした。

実践事例Ⅰ〔研究授業：６月〕第５学年　書き手の意図を考えながら新聞を読もう「新聞記事を読み比べよう」では、授業実践をするに当たり、他の担任に「自分の授業ではどうするか。」ということを考えてもらうために、全学年の系統がわかる表を作成し、提供した（資料⑧参照）。この資料を提供したことにより、他の担任も、読み比べ単元における授業で、読みのねらいや視点をもって授業実践を行うことができた。また、他の単元でも、この資料⑧のような見方で教材を見ていくと、指導の系統が明確になることから、積極的に他学年の教科書を見て教材研究する姿が見られるようになった。

読み比べ単元を読み比べよう（内容編）

目的：読み比べ単元の指導目標・内容・方法などを比較することにより、学年の系統性を把握し、各学年の指導に役立てる。　《柳川市立矢ヶ部小学校　研修部》

学年・主題・単元名	●ねらい　◎教材設定の意図	学習指導要領　赤：重点指導事項　青：言語活動	比較する文章	読み比べの視点
【第６学年】 ◆書き手のくふうを考えながら新聞の投書を読もう 「新聞の投書を読み比べよう」 配当時数６時間 （読む４・書く２）	●読み手を説得するための工夫を読み取る。 ◎新聞の投書を比べて読み、読み手を説得するための工夫がどのようになされているかをとらえ、文章を評価する力を育てる。	C（1）イ「目的に応じて、本や文章を比べて読むなど効果的な読み方を工夫すること。」 C（1）ウ「目的に応じて、文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実と感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」 C（2）ウ「編集の仕方や記事の書き方に注意して新聞を読むこと。」 B（1）ウ「事実と感想、意見などを区別するとともに、目的や意図に応じて簡単に書いたり詳しく書いたりすること。」	４つの投書 投書①:限界をこえた投球には疑問 投書②:勝利を求めてこそスポーツに意味が 投書③:楽しんでするものそれがスポーツ 投書④:限界まで努力することに価値がある	次のことを考えながら読み比べよう。 ・それぞれの書き手は、どんな意見や主張を述べているか。 ・読み手を納得させるために、理由づけの仕方や根拠の挙げ方にどのようなくふうをして書いているか。 ・自分は書き手の意見や主張に対してどう思うか。
【第５学年】	略	略		

系統を考えて授業づくりをするための資料提示。　**Plan！**

読み比べ単元では、「何を」「どのように」比較して読ませ、「どんな力をつけるのか」を研究していった。

↑　**資料⑧　読み比べ単元の系統表**

事前授業では、教室から離れた場所での指導案審議とは違い、子どもの姿をイメージしながら意見交換が行われるため、つまずきや必要な支援の方法が見えてくるよさや、だれもが意見を言い合える雰囲気になるよさがあった。「自分だったら・・・」という意見が多く出され、研究授業が授業者だけのものではなくなっていった。

また、指導案（資料⑨参照）には、研究主題に関わる「本時の主張点」と「読みを深め合う段階の【学習の山場】」を示し、実践から研究の内容を明らかにしていった。特に、【学習の山場】を考えることで、どの担任も、具体的な比較活動の内容や支援の方法を考えることができるようになった。

本時　平成２５年６月２４日（月）　第６校時

本時目標

1　新聞記事の写真は、書き手が一番伝えたい記事の内容（意図）が読み手により強く伝わるようにする役割があり、写の振り方の違いで受け取られる記事の印象も違うという を読み取ることができるようにする。

2　二つの記事をもとに、写真がある場合とない場合 写真を入れ替えた場合の印象を比較させることにより 手の意図によって載せる写真が変わることに気づか き手の立場に立って、記事と写真の関係についての め合うことができるようにする。

準備　流れ図　本時文　写真（児童 用）

展開

【本時の主張点】

本時のねらいにせまるために、次の３つの比較活動を行う。

①　二つの記事と二枚の写真を比較させることにより、どの記事にどの写真をのせるかを選ばせ、その根拠と理由を話し合わせる。（はじめの読み）

②　写真がある場合とない場合を比較させることにより、読者の興味や記事の伝わり方が違うことに気づかせ、写真の効果について話し合わせる。（深まった読みⅠ）

③　写真を入れ替えて比較させることにより、伝えたい記事の内容と写真が合わないことから、書き手の写真の選び方について話し合わせる。（深まった読みⅡ）

テーマと関わる内容の明示。 **Plan！**

		思考を促す支援
つかむ	1　二 めあてをつかむ。 （1）予想していた写真の内容とその根拠と理由を発表する。 A社：アユの写真、つり人の写真・・・ B社：多摩川の写真、人々の写真・・・ （2）記事に合う写真を選び、本時学習のめあてをつかむ。 めあて　書き手は、何のために写真をのせているのだろう。	○　前時に予想していた写真の内容を出し合わせ、記事の内容と写真の選び方には関係があることに気づかせる。 ○　二枚の写真を提示し、記事に合う写真を選ばせることにより、書き手が写真をのせた意図を考えていくというめあてをつかませる。
／つくる	考えをつくる。 こと ・記事の内容や見出しの言葉 拠がわかる。 3　写真の効果（役割）について話し合う。	○　記事に合う写真を選んだ根拠と理由を書かせることにより、記事の内容と写真を関連づけて読むことに気づかせる。 ○　三つの比較活動を通して、写真を読み解かせ、記事との関係を考えさせる。
／深める	【学習の山場】 比較活動① 記事に合う写真はどっちか？ A社　しぶきを上げてはねあがる きらめく銀のうろこ　若アユ さかのぼっている アユ ⟺ 多摩川 B社　多摩川をさかのぼるアユ さまざまなもよおし 自然に親しむ小学生 ◎伝えたいことの中心に合う写真がのせてある 比較活動② 書き手はなぜこの写真を選んだのか？ もし、写真がなかったら…？ A社　アユの様子が伝わりにくい。 ⟺ B社　多摩川の様子が伝わりにくい。 ◎写真があると、記事の内容がより強くイメージできる。 比較活動③ 写真を入れ替えたら？ A社　人々は関係ない？記事にないことが写真にのっている。 ⟺ B社　アユの様子はわかるが、多摩川の様子がわかりにくい。 ◎入れ替えると、筆者の意図が伝わりにくい。書き手は写真を選んでのせている	
／まとめる	4　本時学習をまとめ、読みの深まりの振り返りをする。 まとめ A社の書き手は、しぶきをあげて勢いよくはね上がる「江戸前アユ」の若々しい姿を中心に伝えようとしている。 B社の書き手は、アユが増加するほどによみがえった多摩川の自然に親しむ人々の様子を中心に伝えようとしている。 つまり、書き手は、伝えたいことの中心が読み手により強く伝わるように写真のとり方の違いまで考えて写真を選んでのせている。	○　書き手が写真を載せる意図について、まとめを書かせるために、児童の実態に応じた支援を行う。 a：文型を与える。 b：キーワードを与える。 c：A社・B社に合うまとめの文を選択させる。

「読みを深め合う段階」の具体的支援の明示。 **Plan！**

↑　**資料⑨　指導案の形式の統一**

②　アーD　授業研究当日の役割分担を行った。

研究授業当日は、毎回、研修グッズとして、付箋（３色）・マジック・ホワイトボードを

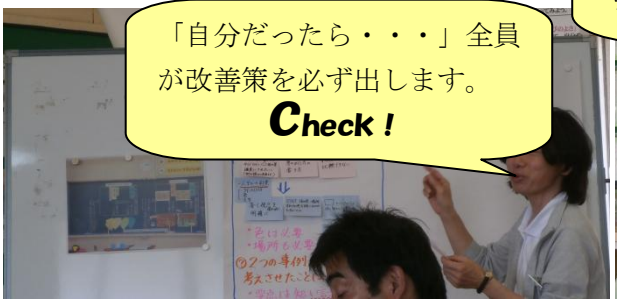
準備しておき、事前授業で明らかになったことをもとに、発問・板書を記録したり、３色の付箋に成果（黄）課題(桃)改善策（青）を書いたりビデオ撮影をしたりした。

③ アーＣ　ワークショップ型授業整理会の運営を行った。

本校のワークショップ型授業整理会のファシリテーター（進行役）は、全担任が交代で行うことにした。従来は、教務主任や研究主任が行ってきたことを、全員が行うことで、研修への参画意識が高まり、全員が研究推進者の一人であることを自覚し、授業や研究の資質・能力も高まると考えたからである。

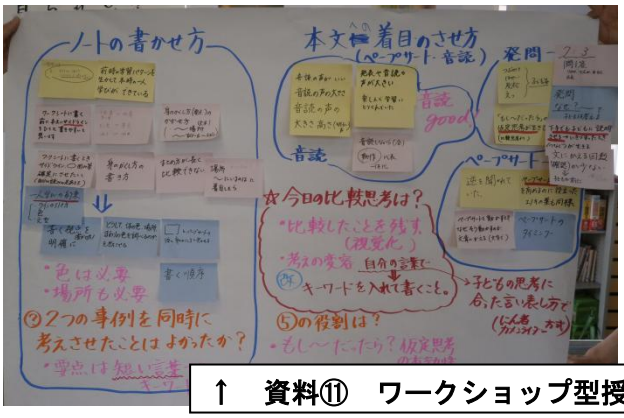
↑　資料⑩－１　板書中心の協議会

↑　資料⑩－２　図書室での協議会



↑　資料⑩－３　参画意識が高まる協議会

↑　資料⑩－４　校長・教頭による指導



↑　資料⑪　ワークショップ型授業整理会のまとめ

また、ワークショップ型授業整理会のよさには、年齢・経験・専門に関係なくだれもが意見が出せるというよさがある。資料⑩のように、校長・教頭・研究主任はもちろん、各担任、専科、養護教諭まで全ての教職員が意見を述べることができる。その中で、ファシ

リテーター（進行役）は、言いっぱなしにならないように、研究主題にせまる項目・視点ごとに整理し、改善策をまとめていった（資料⑪参照）。

④ アーA　リレー研修だよりの役割分担を行った。

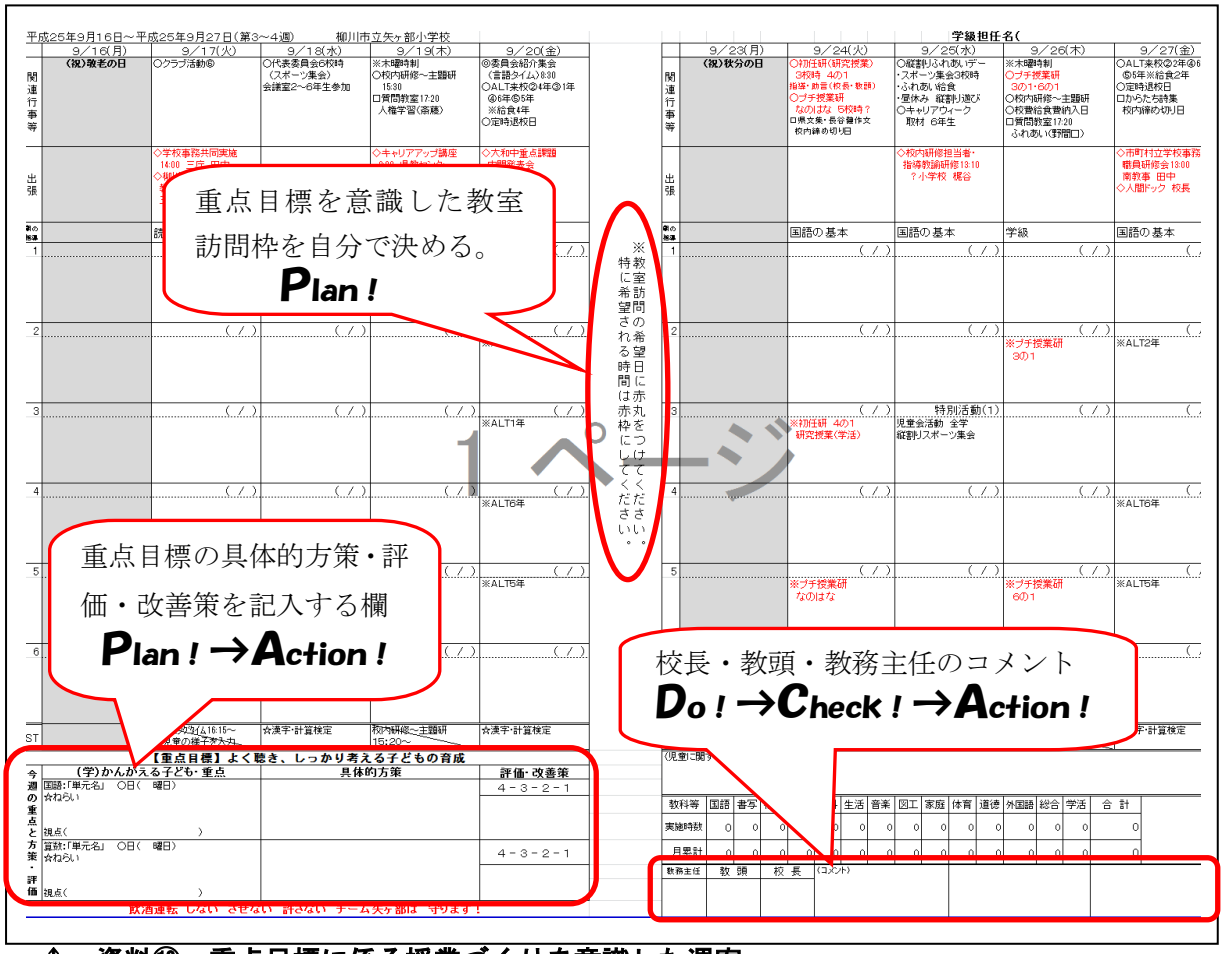
研究のまとめについては、従来は３学期にそれぞれの授業者が個々のまとめを印刷して製本し、保管しておくようにしたり、研究主任が研修便りとして一人でまとめたりしたものが多かった。しかし、このまとめ方では、研修の日常化につながらなかったり、研究主任一人の資質・能力が高まるだけになってしまっていたりした。そこで、ワークショップ型授業整理会でまとめたものをファシリテーターが書き（研修便り①）、授業者本人が考察を書く（研修便り②）ようにした（資料⑫参照）。

← 資料⑫　研修便り①

↓ 研修便り②

⑤ イーP　重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成を行った。

深い教材研究と審議の積み重ねのもとで行われる研究授業の成果を日常の授業において発揮させ、研修の日常化を図るために、週案の中に重点目標の具体的方策を記入する欄を設けた（資料⑬参照）。週案の形式は、平成２４年度までのものに、改良を加え、国語科・算数科の教科別にねらいを書いたり、授業の視点を書いたりする欄を設けたりした。また、校長室と職員室に掲示することにより、連絡・調整の時間が省かれ、会議の簡素化を図ることができた。



↑　**資料⑬　重点目標に係る授業づくりを意識した週案**

⑥ イーD　教室訪問による見取りを行った。

重点目標を意識し、具体的方策を考えた時間を教室訪問の時間とし、赤丸や赤枠がある時間には、校長・教頭・教務主任による教室訪問を行った。教室訪問についての評価や学級経営について等のコメントの記入欄も週案に位置づけている（資料⑬参照）。

⑦ イーCA　プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入を行った。

研究授業と違って、担任をしている教職員にとって日常の授業は互いに見えにくい。しかし、この日常の授業による児童への影響の方が、研究授業よりも大きいと考える。１年に１～２回の研究授業を見合うことで、果たして本当に協働してすすめる研究ができているといえるのだろうか、と考えた。そこで、研究の重点である「読みを深め合う段階」の１５～２０分だけを見合うショートの授業研を実施することにした。これをプチ研修と名

付け、指導案なし、板書・発問計画のみの授業を行うことにした。このプチ研修のねらいは、研究授業のように時間はかけないが、日常の授業づくりに生かすために、教材研究・教材解釈の力をつけることである。

また、研究の見える化を図るために、職員室に研修ボードを設置することにした。プチ研修の授業整理会は、この研修ボードを囲んで行った。これを、スタンディングミーティングと名付けた。文字通り、ほとんどが立ったままで、プチ研修について意見を出し合った。「読みを深め合う段階」に協議の柱を決めているので、短時間で行うことができた（資料⑭参照）。

↑　**資料⑭　スタンディングミーティング－研修ボードを囲んでのプチ研修の授業整理会－**

しかし、このプチ研修だけでは共有化は十分ではないと考え、研修ボードには、教室訪問を行ったときの板書や教室環境（言語環境）など、重点目標に関わる写真や情報の掲示を行った。週案については、重点目標に係る具体策を書くだけに終わらないよう、２週間に１度、評価・改善策を記入する欄も設けた（資料⑬参照）。

（４）【成果と課題の共有化】段階における働きかけ

①　重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価の結果分析をした（資料②・⑮参照）。全体的にポイントが上昇しているが、特に目立って評価が上がった項目は、新設した「教職員のカリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組」の欄である。このことから、教職員の授業づくりへの思いや研修への取り組む姿勢の向上が見られることがわかる。これを受けて、本年度は、重点目標「生き生きと活動し、粘り強く考える子どもの育成」を目指し、それを具体化した項目を教職員全体で共有化し、教育実践を行っている。

②　児童対象の学習満足度アンケートの結果分析をした。特に、「分かりやすい板書」「考えや思いを聞く受容的態度」「ノートや作品の評価」について良い評価をしている割合がアップしており、担任の授業力に対する評価が上がってきていることがわかる。このことから、各学年ごとに改善策を考え、それを共有し合ったことにより、教師の意識の変容と PDCA サイクルによって学習活動が評価・改善されてきたことが児童による評価からも見取るこ

とができる。課題としては、「考えを関係付けてつなぐこと」が挙げられる。

④ 学級経営	常に笑顔を意識し、子どもたちに笑顔で接した。	−０．１
	登校時の子どもたちを教室で迎えたり、休み時間の子どもたちの人間関係や行動について観察し、実態把握及び児童理解を行った。	＋０．１
	子どもたちとの関わりを重視し、個々の存在を大切にした励ましや賞賛等ができた。	＋−０
	「間違いを言える」「間違いを認める」「他のよさを認める」等の学級での支持的風土をつくるための指導を行った	＋０．４
⑤ カリマネの機能を活かした職務・校内研修への取組	自己の校務分掌を把握し、計画的に企画・立案・起案・実施することができた。	＋０．５
	実施後の評価をもとに、改善（来年度へ向けての具体的な取組）を明らかにした。	＋０．４
	校長、教頭、教務主任及び教職員と連携を図りながら、校務分掌を遂行することができた。	＋０．５
	授業づくりについて、自分の考えを積極的に述べることができた。	＋０．５
	授業研究及び授業整理会を通して、日々の授業づくりの具体化（週計画案作成時等）を図ることができた。	＋０．３
	国語科の授業づくりを他教科及び他領域に活かす授業づくりができた。	＋０．３
	授業研究及び授業整理会を通して、自己の授業力（授業構想力・授業実践力）を高めることができた。	＋０．１
	学　級　平　均	＋０．３６

教職員の指導力向上に向けての意識が向上し、自己評価が上がった。

Check！

平成２５年度の課題を受けて、本年度も項目を修正した。

Action！

←資料⑮　重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価の変容

③　各学力調査や市販テストの結果分析をした。研究主題との関係や学年ごとの相関性を見るために、市販テストの結果から、述べる。

国語科の「読むこと」において、１～３年生は、２学期に平均点が上がり、３学期に下がるという傾向が見られたが、いずれも目標値の８５点を上回っている。４・６年生は、１学期から３学期にかけて、平均点が上がっている。５年生は平均点が上がり、目標値に達することもできた。全体平均は、２．７点の伸びが見られ、目標達成ができた。（資料⑯参照）

課題としては、個人差があることにより、個に応じた指導の必要性が挙げられる。

→資料⑯　市販テストの平均点の変容

※緑は85点以上達成。
赤は70点未満で課題。

学年		読むこと	
1年	1学期		0
	2学期	＋4.1	1 ↑
	3学期	−0.1	9 ↓
	年間		3
2年	1学期		1
	2学期	＋1.9	5 ↑
	3学期	−1.3	4 ↓
	年間		1
3年	1学期		1
	2学期	＋4.2	1 ↑
	3学期	−0.2	1 ↓
	年間		2
4年	1学期		1
	2学期	＋11.4	4 ↑
	3学期	＋５	0 ↓
	年間		5
5年	1学期		1
	2学期	−0.1	1 ↓
	3学期	＋9.9	1 ↑
	年間		3
6年	1学期		1
	2学期	＋6.2	2 ↑
	3学期	＋2.7	1 ↓
	年間		1
全体	1学期		1
	2学期		1 ↑
	3学期		1 ↓
	年間		

（５）全体考察

カリキュラムマネジメントの手法を取り入れた教務運営を通して、校内研修が協働し、組織的にすすめられたかどうかを、研究の実際（１）～（４）と資料⑰の教職員へのアンケートをもとに考察する。

①　【課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）

この段階では、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケート、各学力調査や市販テストの結果分析をおこなった（資料②～⑤）。その結果、

資料⑰のウ・オ・キのように、教職員の「それぞれの実践をもとに研究主題をより具体化していこうとする姿（連続）」や「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿（発展）」が見られた。このことから、課題を共有化し、評価項目を具体的に示したことで、目指す自己の姿と児童の姿が明確になったと考える。

② 【計画の共有化】段階における働きかけ（P）

この段階では、研修の目標、内容、方法について話し合ったり、年間計画を立てたりした（資料⑥参照）。その結果、資料⑰のウのように、前もって研究主任と連携して資料の提供を行うことができた。このことから、いつ・だれが・どんなことを・どのように研修・授業を行うのかなど、組織の役割が明確になったと考える。

③ 【実施】段階における働きかけ（D）

《授業研究の場合》以下の働きかけを行った。

(1) 教材研究や授業づくりに役立つ資料の提供や事前授業の設定（資料⑧・⑨参照）
(2) 授業当日の役割分担・ワークショップ型授業整理会の運営（資料⑩・⑪参照）
(3) リレー研修便りの役割分担（資料⑫参照）

(1) の結果、資料⑰のアのように、「児童の実態をもとに教材研究や支援の在り方を究明する姿」「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」が見られた。

(2) の結果、資料⑰のイのように、「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」「研究の成果を価値づけ、継承していこうとする姿（連続）」が見られた。

(3) の結果、資料⑰のカのように、「自分の研究成果を他の教職員に広げていこうとする姿」「研究の有効性を分析し、課題に対する改善を加えていこうとする姿（発展）」が見られた。

以上のことから、(1)～(3)の働きかけを行ったことで、次のような有効性があったと考える。

○ 授業者が一人で悩みを抱えることなく、全員が参画意識を持って授業に取り組むことができた。

○ 全員が自他の授業改善を意識し、日常の授業を変えていくための校内研修の在り方が明確になった。

○ 教職員全員が課題を解決するための方途が明確になり、互いの資質・能力の向上に向けて学び合う研修のよさを味わった。

《日常の授業の場合》以下の働きかけを行った。

(1) 重点目標に係る授業づくりを意識した週案の作成（資料⑬参照）
(2) 教室訪問による見取り・プチ研修や研修ボードによる授業の見える化と週案への評価・改善の記入欄の設定（資料⑬・⑭参照）

(1) の結果、資料⑰のキのように、「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿」が見られた。

(2) の結果、資料⑰のカのように、「日常的に課題を意識した研究・授業をする姿」「他の教職員のよさを自分の研究・授業に取り入れていこうとする姿」が見られた。

以上のことから、(1)～(2)の働きかけを行ったことで、次のような有効性があったと考える。

○　重点課題を意識した週案を活用し、日常の授業から変えていこうとする教職員の意識化を図ることができた。

○　「これは、どうやって授業しているのですか。」「この資料があったらください。」「このカードの掲示いいですね。」など、研修ボードを見た担任が、当該担任と話す姿が見られるようになった。

④　【成果と課題の共有化】段階における働きかけ（ＣＡ）

この段階では、重点目標（学力面）に対する達成状況の教職員の自己評価、児童の学習満足度アンケート、各学力調査や市販テストの結果分析を行った（資料⑮・⑯参照）。その結果、資料⑰のエ・クのように、研修の日常化や自己の授業力向上への意識化を図ることができたり、今後の課題を明確にしたりすることができた。

３学期には、授業実践をした各担任・専科・支援加配の教職員による、研修のまとめ報告会を行った。このことは、各々が研修してきたことの成果や今後の課題が示され、次年度の方向性が明らかになる上でも有効な研修であった。

教職員へのアンケートより　　抜粋

回答者

Ａ教諭（平成２４年度赴任５０代）　Ｂ教諭（平成２５年度赴任４０代）　Ｃ教諭（平成２６年度赴任３０代）

質問項目８つ

ア　矢ヶ部小学校の主題研修の良い点

Ａ：アットホームな感じで協力体制ができている。一人ひとりが真剣に研修にのぞんでいる。一言で言うと、全員で関わる授業づくりを行っている。

Ｂ：日々の授業実践に活かせていること。知らないこと、わからないこと、子どもがよくわかるための手立てや日常からできるひと工夫等、学ぶことが多い。

Ｃ：全員で研修に臨んでいること。

イ　これまでの研修と違う点（特徴）

Ａ：事前研に力を入れている（発問・板書）。授業整理会でそれぞれの立場で意見が述べられる。

Ｂ：ワークショップ型授業整理会により、職員の参画意識が高められている。

Ｃ：意見の交流がしやすい。

ウ　自分の研修に対する考え方・態度などで、変わった点。

Ａ：自分が授業するとどうかという、自分の問題としてとらえる意識が強くなった。自分の考えを出せるようになり、他の先生方からもたくさん支援していただき意見がもらえた。

Ｂ：本質的な内容を気軽に質問できる。他の先生の指導法を知り、日常の積み重ねがいかに大切かを学んだ。子どもへの言葉のかけ方も変わった。主体的に参加し、自分の意見が述べることができるようになってきた。

Ｃ：様々な観点から授業が見えるようになってきた。

エ　研修における改善点

Ａ：授業力をもっとつけたい。公開授業で学んだことを自分のものにしていくこと。

Ｂ：研究主題を具体化したものを実際の授業でどう生かしていくか。

オ　研修をして、子どもたちの変容が見られたか。あれば、どんなことか。

Ａ：話を聴くことができるようになってきた。

Ｂ：トライアングルトークで考えを出し合い、相手の考えを聞こうとする態度が見られるようになってきた。比較するとよく発表できるようになった。

カ　他の教職員との連携で行ったこと
Ａ：研修での情報交換や意見交換。
Ｂ：どの先生の授業も、自分だったらこうする、という考えを提示できるように努力した。悩みや苦労をわかちあった。
Ｃ：研修以外でもアドバイスがもらえる。
キ　研修の日常化が図られているか（授業研究を通して、普段の授業が変わったか）
Ａ：Ｔ３：Ｃ７を意識している。考え、話し合う時間の設定をしている。
Ｂ：板書・比較活動を意識して授業するようになった。日頃からペアトーク・トライアングルトークを行っている。
Ｃ：日常の授業への意識が変わった。
ク　その他（日常の授業で困っていること、課題だと思っていることなど）
Ａ：一斉学習の時に、個人差があること。個に応じた手立てのくふう。
Ｂ：学力の差が大きく、もっと個別に指導したいがなかなかできない。Ｔ３：Ｃ７が日常的にできない。
Ｃ：板書の構造化、交流。

↑　資料⑰　教職員への校内研修に関する意識アンケート

６　成果と課題

（１）研究の成果

①　【課題の共有化】（ＣＡ）からスタートし、【計画の共有化】（Ｐ）→【実施】（Ｄ）→【成果と課題の共有化】（ＣＡ）の各段階において、教務主任としての働きかけを行ったことで、マネジメントサイクルが循環し、めざす教職員の姿が見られるようになった。

②　担任の授業力向上とともに、児童の学力の伸びが見られた。

（２）研究の課題

①　各教職員の課題が、キャリアステージや受け持っている学級の実態によって違うことを受け止め、個々の課題に対する改善策を共有化し、主題研修とともに校内研修の中に位置づけ、さらに組織的な教務運営を行っていくことが必要である。

②　国語科の研究を起点に、一般化し、他教科・多領域における日常の指導力向上に向けて、校内研修をさらに協働し、組織的にすすめていくことが必要である。

＜参考文献＞

・田村　知子 *et al.*（平成１３年）「実践・カリキュラムマネジメント」　ぎょうせい
・文部科学省（平成２０年　８月）「小学校学習指導要領解説　総則編」　文部科学省
・福岡県教育センター（平成２５年）「校内研修のすすめ方」　ぎょうせい
・独立行政法人教員研修センター（平成２５年）「教員研修の手引き」
独立行政法人教員研修センター
・福岡県教育委員会（平成２２年度改訂）「活力ある学校運営の手引」
福岡県教育委員会　福岡県